

詩篇 126 篇

都上りの歌

《復興の喜び》

- 1 主がシオンの繁栄を元どおりにされたとき、私たちは夢を見ている者のようであった。
- 2 そのとき、私たちの口は笑いで満たされ、私たちの舌は喜びの叫びで満たされた。
そのとき、国々の間で、人々は言った。「主は彼らのために大いなることをなされた。」
- 3 主は私たちのために大いなることをなされ、私たちは喜んだ。

《復興のための祈り》

- 4 主よ。ネゲブの流れのように、私たちの繁栄を元どおりにしてください。
- 5 涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。
- 6 種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

本篇は内容的に半々に分かれています。順序としてあべこべな感があります。全体としてバビロン捕囚からの帰還後のことが語られているようですが、前半では既に帰還し繁栄が取り戻されたことを喜んでいるのに、後半では未だ復興の初段階のような書き方をしています。この問題をどう解決するかが課題ではありますが、できるだけ素直にテキストを読みたいと思います。

70年近くに亘るバビロン捕囚から解放されたユダの民は、ペルシャ帝国の援助を受けつつ祖国に帰還しました。そして、破壊されたエルサレム神殿の再建に取り掛かりましたが、民はまず自分たちの住まいを建て直すことに腐心していました。預言者ハガイは、神の宮の再建が後回しにされているこの状況を見て、民に厳しいメッセージを送っています。

主の言葉が、預言者ハガイを通して臨んだ。「この神殿が廃虚となっているのにあなたがたが板張りの家に住む時であろうか。」（ハガイ1:3-4）

それからゼルバベルやネヘミヤを中心として神殿再建作業が開始され、反対者たちの妨害に遭いながらもついに建物は完成しました。

城壁は五十二日かかって、エルルの月の二十五日に完成した。（ネヘミヤ6:15）

ネヘミヤ書ではこの後、神殿で律法の書が朗読され仮庵祭が行なわれたことが記録されています。その祭りに参列する人々の喜びをイメージすることができるでしょう。

主がシオンの繁栄を元どおりにされたとき、私たちは夢を見ている者のようであった。そのとき、私たちの口は笑いで満たされ、私たちの舌は喜びの叫びで満たされた。そのとき、国々の間で、人々は言った。「主は彼らのために大いなることをなされた。」主は私たちのために大いなることをなされ、私たちは喜んだ。（詩篇126:1-3）

2節と3節で繰り返される「大いなること」とは、主の救済の御業を指します。人間の力では不可能であった捕囚からの解放が、神の民の歴史に新たに刻まれました。過去にはエジプトでの奴隷生活からの解放という出来事もありましたが、これらはやがて主イエスによって成就する罪人の罪からの解放を予表していたと言われます。つまり、本篇の読者は自分が罪赦され人間としての本来の姿を取り戻し始めたことを喜び祝うことができるでしょう。「主がシオンの繁栄を元どおりにされた」とは、私たちの人格が主イエスの人格と結びつき、オリジナルの状態に戻りつつあることを暗示しているようです。救いの喜びは、まさに「**私たちの口は笑いで満たされ、私たちの舌は喜びの叫びで満たされた**」ということばでもって表されます。

このように、3節まで復興の喜びを歌っていたのに、4節以下では再び復興を求める祈りがささげられます。「**ネゲブ**」（4節）とは、ユダの南に広がる砂漠地帯で、これほど乾燥した地域も珍しかったようです。しかし、そのような地に豪雨が降り、瞬く間に砂漠を潤いのある地に変えてしまうことがありました。その豊かな水の流れをイメージして、ユダの土地が再び稔り豊かなものとなることを願っていると思われます。畑というものは一度休耕してしまうと、再び作物ができるようになるのに3年を要すると言われます。神殿の再建に次ぐ課題として、土地の復旧が急務だったのかもしれませんが。その意味で、5～6節では「種蒔き」に関する内容が出てくるのではないかと解釈しました。「**涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る**」という聖句は大変有名で、自分が蒔く種が無駄になるかもしれないという不安とは裏腹に、それが豊かな稔りとなる期待を込めて「種蒔き」に勤しむ農夫の姿をイメージさせます。これは、伝道者がいつの日にか刈入れ時がやってくることを信じて御言葉の種を蒔き続けることの比喩として引用されることがあります。地域に一枚一枚配布する教会案内は、すぐには効果が出ないかもしれませんが、確実に誰かの目に留まっており、その希望のことばがいつかその人々の心の中で芽を出すということを信じます。蒔かれた種に水を注いでくださる神様に期待を寄せ、信じて祈るとき、必ず聖霊が働いてくださるでしょう。

このように、本篇は神殿再建と土地の復旧という二つの側面からユダの回復を語っていると見ることができそうです。それにしても、やはり第一とすべきは神を礼拝することであるという順序が心に留まります。

まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはみな添えて与えられる。

（マタイ6:33）